

発射出来なかった重機関銃

福岡県 野田 立夫

私は大正十一（一九二二）年十一月十三日、農家の七人兄弟の長男として生を享けました。小学校を卒業して十六歳までは家の農業の手伝いを致しておりましたが、戦争が拡大し軍需産業の生産増強が叫ばれる時、三池製作所渡瀬工場に入社、兵器の部品製作に従事するようになりました。会社から働き盛りの青年が次々と応召し、人手不足となっていました。

昭和十七（一九四二）年の秋、徴兵検査を受け「甲種合格」となりました。徴兵検査官から「甲種合格」と言い渡され、「やった甲種合格だ」と飛び上って喜びました。

明けて昭和十八年一月十日、久留米市の歩兵第四十八連隊に入営しました。当日は現役兵は私人、召集兵一人が瀬高駅で日の丸の小旗を振って

万歳々と叫んで盛大な見送りを受けました。

両親にとつて働き手の長男を戦場に送ることは辛いことだと思えますが、涙一つ出しませんでした。五人の子供たちの養育も大変であろうと思いましたが、当時の世相は我が子を戦場へ送ることは家門の誇りとされた時だけに女々しい言葉はいえない辛さがありました。「体に注意して頑張れよ」といつてくれた両親に「ありがとうございました」と頭を下げ、手を振りました。

久留米第四十八連隊は戦争に強い歩兵連隊として有名だと先輩から聞かされておりました。当時第十二師団の主力は北満州にあつて、ソ満国境の警備の任務についていました。私は第一大隊第二中隊に配属され機関銃班に所属しました。そして三カ月間の一期の検閲が済むまでの内務班教育と訓練は予想を上回る激しく厳しい毎日でした。

覚悟はしていましたが男同志の世界の一日の過ぎることの早いこと、起床ラッパで飛び起きて毛布の整理から室内の掃除に、飯上げ当番に朝食後

の後片付け、訓練への準備、さあ練兵場へと集合、整列、厳しい訓練に昼食、午後の訓練でくたくたになって夕食の準備と後片付け、古兵の手伝いと身の回りの整理、点呼の時の軍人勅諭の暗誦、古兵の叱声とびんたで目から火が出るような思いでした。貴様達は「たるんどる前支えだ」と初年兵一同「前支え」をさせられ油汗が出ました。

やっと一期の検閲が終わり「ほっと」する間もなく、四月上旬、桜の花が咲くころ北満州へ移動を命ぜられました。久留米から下関へ輸送船で釜山港へ、釜山から軍事列車で朝鮮半島を縦断して満州国へ奉天（瀋陽）から新京（長春）、ハルピン、牡丹江を経由して城子溝へと一週間がかかりで到着しました。

北満州はまだ雪で真白でした。満州第三〇六部隊は私達の本隊で、立派な煉瓦造りの兵舎で防寒用の設備も完備していました。城子溝はソ満国境に在り、ソ連への警備が任務でした。到着早々防寒用服装が与えられ訓練が始まりました。私達の

重機関銃隊には馬が十頭所属しており、雪の中の馬の手入れや飼育は大変な仕事で、古兵からは「貴様達より馬が大切だ」と叱られながらの手入れでした。

昭和十六年四月、日ソ中立条約が締結されてからはソ連軍の主力が独ソ戦線に向けられているためか、高台から見限りソ連兵の動きは小人数のように見られましたが防備と警戒を怠ることは許されず、厳しい警戒は連日連夜続けられました。

六月になってやっと凍土がなくなり草木の芽が吹き出しました。七月になると大陸性気候で焼きつくような暑さとなり、九月下旬になると早、肌寒くなります。「赤い夕陽の満州」と歌の文句にもあるように大きく赤い美しい夕陽でした。

十月になれば北のシベリアから寒い風が吹きつけて雪になります。毛皮の防寒服、外套、防寒靴が支給され、氷点下一〇度ぐらいでも風が吹けば体感温度は氷点下三〇度ぐらいの寒さになります。馬のいる私達の重機関銃隊は、雪の中の訓練で水

を探し飲ませるのが一苦勞でした。飯盒の飯も凍ってザクザクして食べられないこともありました。

昭和十九年三月、私達の中隊は南方要員として転進を命ぜられました。北満州に來た時の逆コースで釜山へ、釜山港で輸送船「ハンブルツク丸」(ドイツから分捕った古い船)に、他の部隊も乗船し、総員二千人ぐらゐとなりました。それに資材、武器、弾薬を徹夜で積み込み門司港でさらに食糧等が積まれ、船内は身動きも出来ない鮎詰めの状態でした。

台湾の澎湖島に寄港し、高雄港で船団を組み、南下中に米潜水艦を発見し、護衛の駆逐艦と友軍機により撃沈しました。しかし「ハンブルツク丸」が機関の故障で船団から離れて高雄港で修理することとなり、いったん上陸して高雄の競馬場で二週間宿営しました。

高雄の緑と花が美しく目にしみるように映りました。修理が終わり、乗船は駆逐艦の護衛で高雄港を出港しました。心配したバシー海峡も無事通

過し、船内では熱帯服の半袖半ズボンの服に着替えて、胸の前後に救命胴衣を着けました。そして緊張の中、比島ミンダナオ島のダバオ港に寄港しました。寄港中に巡洋艦と駆逐艦の二隻が入港して來ましたが、この軍艦は海戦からやつと逃れて來た日本海軍の最後の軍艦で、ヤップ島に上陸しても今後何も援助は期待するな、先ず穴を掘り陣地を築けと言明されたとのことでした。

ダバオを出港し藍黑色の太平洋と純白の波、強烈な陽光を浴びて船は東へ東へとろい速度で敵潜水艦を警戒しながら進みました。船内は蒸し風呂同様な暑さで、救命胴衣を着けたまま甲板に出て涼みました。

私達の目的は日本の委任統治に属する島々を守るため中継地になるヤップ島に上陸し、防備することだと聞かされました。はるかかなたに島を発見「ヤップ島だ」と誰かが叫ぶ、近づくにつれ椰子の木の美しい島で胸の高鳴る思いでした。上陸したのは四月上旬で、満州を出発してから一カ月

になります。三日三晩、兵器、弾薬、器材、食糧、衛生材料の荷揚げ作業でした。

ヤップ島は、本島とトミール、マップ、ルムゲンの三島からなり、北半分は珊瑚礁、南半分は火山地で、海岸は椰子林、所々に白砂の海岸があり高地は熱帯林の密林でした。ほとんどマングローブが海中の中まで繁っていました。

上陸地コロニーは一カ月前、米軍の空襲を受け、椰子の木がなぎ倒され無残な姿でした。島民は約五千人といわれ、大部分はカナカ族、原始人時代そのまま、全裸の肌は黒褐色に光り、男は禿一つ女は腰褌一つで口は真赤で、日本語を上手に話しました。全島の海岸は三百メートルぐらい先まで深さ二メートルぐらいの遠浅で、その先は珊瑚礁で囲まれ天然の防御線となっていました。

私達が上陸を済ませると島に住んでいた日本人が最後の引揚者として乗船しました。しかしその船が洋上に出たころ「ドカン」と轟音が島全体に響き渡り、まるで地震のようによれ、みんなびつ

くりしました。後で米潜水艦の魚雷が環礁に当たって爆発し「ハンブルツク丸」も沈没したと聞きました。

グアム島より海軍陸戦隊、飛行場設営隊、高射砲隊、野戦病院等が上陸し、島は一挙に一万人以上の人口になり、それぞれ陣地構築と宿営の建設を始めました。上陸して日もたないうちに病人が出始め、熱病、下痢患者、デング熱、アメーバ赤痢、腸チフスなどの患者が出ました。

五月末、第三十一軍司令官他数人の将校団が陣地構築指導に来島しましたが、敵大機動部隊来襲の電報で急ぎサイパン、グアムに引き返しましたが、この将校たちは七月初め、サイパン島玉砕で戦死したと後日聞きました。

六月になって基地となった飛行場に海軍航空隊が配備され、零戦の編隊が毎日北へ向って飛び立ちました。しかし三時間ぐらいすると半数以下となり帰って来ます。米軍がヤップ島からサイパン島向け出撃するのを察知したのか、米軍爆撃機コ

ンソリB 24のヤップ島爆撃が始まりました。

必ず午前十一時、トミール島のかなたから二十四機編隊、高度三千メートルぐらいで紺碧の青空に銀翼を輝かせ、天地を轟かす大音響で飛来し、多量の爆弾投下で島が揺れます。三日間の爆撃で零戦と彗星は吹き飛ばされ、飛行場は穴だらけになってしまいました。

高射砲隊は応援しますが命中しません。海軍機が高く舞上り、米編隊の真上から垂直に降下し、空中爆雷を破裂させる勇敢な攻撃を行いました。

その爆雷によりコンソリB 24三機が落葉のように海に落ちてゆき、米水上艇が救助に来て乗組員を拾って帰る。その中で我が軍の工兵隊と海軍の鉄舟が二人を捕虜にしました。この捕虜に地図を見せて「どこから来たのか」と問いますとニューギニアのホーランディアを指さしたそうです。

この捕虜の証言によって毎日十一時ごろ飛来する理由が判明したそうです。敵機の攻撃目標が飛行場から高射砲陣地に集中し、それに応戦する高

射砲隊が必死で応戦する様は見えていられないほどの壮烈さで、三日間の応戦で三分の二の兵隊は戦死しました。

米空軍機の爆撃は、サイパン島、グアム島の玉砕によりヤップ島への攻撃は増加し、高射砲も全滅した以上逃げ回るだけでした。投下される爆弾の音を聞きながら反対側に逃げ難を避けました。

司令部が攻撃を受け、糧秣倉庫は直撃弾で吹き飛び、補給が断たれている状況の中での糧秣倉庫の被害は大打撃でした。戦争の被害と共に病気の被害も大きく、ほとんどの兵隊がデング熱で苦しみました。三日間ぐらい高熱がつづき発疹し膝の関節が痛くなります。アメーバ赤痢、皮膚病は男の向こうずねがざくろの実をえぐったようになる熱帯潰瘍で、なかなか治らず、その傷にうじが湧く始末で、結核まで多発しました。そして痩せ衰えて倒れる兵隊、全身青白くむくみ腹も顔も浮腫で倒れる者、併せて食事も朝夕二食で、椀の底に米がついているような状態での食事では若い兵隊

は空腹で動けなくなりました。

米空軍機は毎日爆弾投下と機銃掃射を浴びせるため陣地を出て食糧探しも出来ず、病人は増加する一方で野戦病院も人手不足となり大混雑でした。死亡者も火葬にすれば煙が上がって発見され、敵空軍機の目標となります。兵舎は椰子の木を柱に椰子の葉を屋根にかぶせる簡単な建物で、ここに一個小隊約三十人が寝起きしました。

食糧の補給がなくなった以上現地自活について、上層部で協議の結果、野生のさつま芋を増産することとなり、各隊に農耕班を編成しました。亜熱帯のこの島では年に三回から四回収穫が出来るほど発育旺盛でした。そして密林や草原を開墾して芋畑にし、六千人の兵隊の朝夕の主食にするために皆一生懸命頑張りました。

日増しに増加する栄養失調の兵隊。バナナ、パイナップル、パイナップル、パンの実、マンゴー等食べられる物は、何でも食べました。米空軍機が来ない間には海岸に出て小貝や蟹等を採って来て分

け合って食べました。鰐のような一メートルもある大とかげは緑色でゾーツとするものですが、捕まえて来ては食べました。そして食べられる草木から動物や虫類、魚介類など米空軍機の来襲の合間をぬって、生き抜く食糧獲得のための戦いでもありました。

昭和十九年九月七日、米機動部隊が来襲、朝早くから始まった艦砲射撃の物凄い轟音は島全体を震わせました。どこに着弾するか分からず陣地の壕から首も出せません。敵機も毎日の予定時刻より早く低空で襲いかかります。海上から艦砲射撃、空から敵空軍機の波状攻撃、グラマン艦載機の編隊機が群をなして来る様は、まるでイナゴの大群が飛んで来るようで島全体がワンワンと鳴り響き、生きた気持ちはありませんでした。他の小隊の重機関銃の応戦で敵機一機を撃墜しました。翌日も艦砲射撃と機銃掃射の連続で、下手に抵抗すれば機銃掃射の雨が降るので抵抗は出来ない、敵のなすがままの状態です。

三日目、爆撃には来ましたが艦砲射撃やグラマン機の乱舞はありませんので不思議に思いました。後で分かったことですが隣のペリリエー島やアンガー島に米海兵隊二個師団が上陸したとのことでした。この日から島は静かになりましたが、それでも毎日二、三機の敵機が飛来し爆弾を投下します。これは毎日のこと慣れてこになりましたが、食糧難のため皆がやせてくる、泥棒が始り、病気は蔓延する、死者は増加するので大変でした。

楽しみの芋が食べられるようになったのは年末で、元日には服装を直し、海の見える高地に登り、祖国に向い遥拝、君が代を斉唱し一握りの白飯を頂きました。

増加する戦死者の処置には初めはガソリンで焼きましたが、煙が射撃目標になることから、以後は小指だけ切って焼き、遺体は密林に土葬しました。各隊は三分の一が病人、三分の一が守備と陣地構築、三分の一が農耕と漁労に区別し、生き残るための計画を立てました。

また被服がぼろぼろで、兵隊は褌一つの生活ですが、その褌の代わりもなくなりつつあるので、小学校の教科書を見て機織り器を造り布織りを始めました。幸い島にはバナナの葉に似たバナマから繊維がとれ助かったことでした。魚を獲るため網作り、入れる籠作りなど皆で力を合せ努力しました。

上陸以来一年経った四月中旬「飛行場を早急に整備すべし」との命令通信が入り、穴だらけの飛行場を二日間で修理完了した翌日夕方、空襲警報と同時に爆音がして翼に日の丸がついている日本の飛行機がきました。一機はルムング島沖の環礁に燃料が尽きて墜落、飛行機からはい出した搭乗兵達が泳いでいるのを永島大隊員が助け上げ、負傷者は野戦病院に収容されました。二機目は暗くなりかけた飛行場を見つけて着陸、三機目はとんぼ返りになったと聞きました。

この三機はヤップ島に近いウルシー環礁は、米軍のレイテ戦、沖繩戦への補給基地になっている

のを知った日本海軍航空隊が急襲した、その中の三機であることが分かりました。内地から来た航空兵は、私達のボロボロの乞食のような姿を見て驚いておりました。翌日残った一機銀河に負傷兵十数人詰めこんで鹿屋基地へ飛び立ちましたが、後日全員無事到着したと通信連絡があったとのことでした。

その翌日から飛行場はまた蜂の巣のように爆撃を受けました。その激しい空爆を受けながら山の洞窟陣地の構築が続けられ、また芋作りの農耕や海での漁労作業も続けられました。敵機も毎日二機、三機と定期便のように来襲し、空爆と機銃掃射を続けますので、我々は一体どうなるのかと不安な毎日を過しました。

八月六日ごろから敵空軍機が来なくなりませんでした。不思議に思っておりました。上官の話では、八月八日洞窟の中の通信隊が傍受した、メルボルン放送が「太平洋の島々の日本の兵隊さん、日本政府はポツダム宣言を受諾しました。日本は降伏

したのです。貴方達の役目は終わりました」との意味の放送がなされたとかで、まさかと思いません。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送は雑音でほとんど聴けなかったのですが、ガリ版刷りで伝達され、私達はがっかりしました。こんなに苦労したのにと涙が流れましたが、これは私ばかりではありませんでした。

翌日米軍機が一機飛来し通信筒を飛行場に落としました。中には「現地ごとに降伏調印に応ぜよ」と書いてあったそうです。私の部隊では、急いで珊瑚や貝を焼いて石灰を急造し「パラオ集団司令官の命あるまで待て」と英語で飛行場に大書されました。翌日飛来した一機が読んだのでしょうかを振って帰って行きました。

連日の空爆がなくなると拍子抜けしたように張り合いがなくなりました。それでも食糧確保のため農耕と漁労は続けねばなりません。九月三日だったでしょうか、ヤップ環礁沖のチー

ルマン駆逐艦上で降伏調印式が行われました。そして調印式が終わると翌日早速武装解除となりました。武器をアメリカ兵に渡す時の悔しさは言葉ではないような残念さでした。

日本軍から引き渡された武器弾薬は上陸用舟艇に積み込まれ、環礁の外の海にポンポン投げ込まれました。命より大事にと大切にしていた兵器がとこの様子を見ていて、また口惜しい涙が流れて来ました。

米軍の設営隊が上陸しますと先ずブルドーザーで「あつ」という間に地ならしを始めて道路を作りコロニーにキャンプを設営しました。その手早さに驚きました。さすが物量を誇るアメリカ軍だと感心しました。

九月末、日本から迎えの復員船が来ました。二年振りに見る祖国の船には小さな日の丸をつけていました。なつかしさいっぱいでした。先ず野戦病院の病人からと決定され、密林の中に病人が整列し乗船を待ちました。戦友の肩にかつがれてい

る者、担架に横たわる者、皆が手伝って乗船を済ませました。二回目、三回目と復員船は来て、その度ごとに遺骨を抱いた戦友、負傷した兵隊が乗船し島を離れて行きました。残った兵隊は朝八時から夕方五時まで、海兵隊監視の下に道路復旧の重労働をさせられました。

食糧問題は米軍が上陸してからは少しずつ改善され、体重も少しずつ増えて来ました。朝からベークン入りのうどんやだんご汁を作って食べることもありました。アメリカの兵隊が伊勢えびを食べたいから五人の兵隊を出せと要求するので、私達五人が伊勢えびとりに出掛けました。環礁の外側に「伊勢えび」そっくりの一メートルもある巨大なえびがいて、湯をかけると緑色になる怪物でした。

その後復員船も来ました。私達百人ぐらいは最後まで残されました。二月末、最後の復員船として砲座をはずした日本の駆逐艦が迎えに来てくれました。全員素裸にされ検査を受けました。米軍

からよく働いたからとアメリカ兵の軍服と毛布をくれました。

いよいよ日本に帰れると思うといいようのない嬉しさでしたが、この島での二年の生活を思い出して別れ難い思いもしました。

そして駆逐艦が島を離れるにつけ全員甲板に出て、遠ざかる島を眺めながら、戦死した友達、病死した友達のこと、さらに合掌する者、涙を流している者、手を振る者、思いは皆同じでしょう。

その島も見えなくなり復員船は一路日本へと向います。途中グアム島に寄港し三人の兵隊大工を乗船させました。

三月三日、浦賀港に入港、直ちに上陸し海軍通信学校の跡らしい建物で二泊しました。毎日空爆と艦砲射撃で頭ががんにんしていた時、二度と日本の土を踏めようか、これで終わりだと、何回思ったことか。今夢にも忘れ得なかった日本に帰って来ました。戦友と互いに励まし合い別れました。復員列車に乗車し窓から荒れ果てた故国の山や河

を眺め、感慨無量でした。普通列車に乗り換えますと皆さんから「ご苦労さまでした」といわれ嬉しく思いました。

なつかしい瀬高駅には父と弟が迎えに来ておりましたのでなぜだろうと私はびっくりしました。同じヤップ島にいた人で早く帰った人が教えてくれ、私の消息も知り家族みんな安心していたよと父は語りました。

海から見た美しい姿に胸を躍らせて上陸したヤップ島が、一年の間に死の島と化し、連日アメリカ空軍機の空爆に逃げ惑う日本兵、食糧を求めて何でも食べたあの時の悲惨な姿、次々と戦死した戦友達、病気のため死亡した人達、空爆と艦砲射撃が相手で発射しようにも発射できなかった重機関銃の無念さなどが思い出されました。

入営する時一緒に見送りを受けた召集兵の二人の方は戦死されたことを父から聞きました。

入営するまで就職していた職場にも早速挨拶に行き一週間ぐらいして復職も出来ましたが、一時

期ヤップ島で続発しました肺病の菌を持って帰ったのでしょうか、復職しましてから肺病を患いました。

その後回復し八十四歳の今日まで元気でがんばっております。

ヤップ島 命捧げし 戦友の顔
脛に浮び 涙溢るる

トラック島大空襲の脅威

大分県 羽田野 正 士

「天に代りて不義を討つ忠勇無双の吾が兵は」の軍歌に送られて、若い人達が御国のためにと出征して行きました。

昭和十二（一九三七）年七月七日、支那事変が勃発し、十六年十二月八日未明には真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まり、私達の住む小さな村からも次々と赤紙召集により青壮年の方々が出征して行きます。

私は、大分県大野郡上井田村池田という部落で、大正十三（一九二四）年十二月三日、農家の長男として生を享けました。昭和十四年三月、大恩寺小学校の高等科を卒業すると、家族は祖母を含めて十一人の長男でありましたから、両親を助けて家の農業の手伝いをしながら青年学校に通いました。時代が時代だけに村役場の兵事係の方が「若